

東アジアと同時代日本語文学フォーラム

金, 晶晶
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1551327>

出版情報 : 九大日文. 25, pp.162-165, 2015-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

東アジアと同時代日本語文学 フォーラム

K I N
Shoushon
金 品 晶

二〇一四年一〇月二四日から二六日までの三日間にわたって、中国の北京師範大学外国語学院にて〈東アジアと同時代日本語フォーラム〉第二回国際シンポジウムが開催された。二〇一三年一〇月に韓国の高麗大学で第一回大会が開催されて以来、今度は場所を中国の北京に移して東アジア各国から多くの研究者や大学院生たちが集まってお互いの研究成果を発表し、学術交流や議論を行った。今回の会場となった北京師範大学は、多くの大学キャンパスやIT企業が所在する北京市海淀区に位置しており、その大学キャンパスの中にある外国語学院で同シンポジウムは開催された。筆者もこの大会に参加して二泊三日の間、大変貴重な経験をしたので、その大会の様子について少し紹介したいと思う。

シンポジウムの一日目は、それぞれ異なるテーマごとに三つの会場に分かれて、「次世代フォーラム」が行われた。筆者は「東アジアにおける近代の時空間」と題されたセクション1の

会場で『満鮮日報』における朝鮮人のモダニズム詩―その読みの可能性をめぐる―という題目の発表を行った。同会場では筆者より前に四人の大学院生による興味深い発表があったが、その中でも印象深かったのは李青氏（北京師範大学の「教育小説『埋石捨石記』」における教師像―訳者包天笑の改作を中心に―）であった。清の末期に清政府が教育の近代化を図り、教育改革を推し進めようとしていた時期、日本の著名な教育家の一人である小泉又一の著書が中国人によって翻訳され、当時まだ発足したばかりの中国の師範教育に少なからず影響を与えたという。李青氏はその小泉又一が書いた『教育小説 棄石』が包天笑によって『埋石棄石記』という題名で翻訳される過程で改作が行われたことに注目し、そのような改作を行った包天笑の意図を明らかにするとともに、それをおして翻訳者が新たに作り出した理想の教師像について論じた。本発表を聞きながら、あるテキストが翻訳されて異なる文化的・政治的空間へ伝播される際、時として原作者の名前やその創作の意図から遠く離れて、全く別のテキストとして新たな意味を生成することがあると感じられた。そして筆者が現在研究している在満朝鮮人の詩におけるモダニズム的な技法や表現方法も日本人が好んで作品や詩に取り入れた時とそれらが在満朝鮮人の詩に登場するときとは詩作品全体が帯びる意味や政治性も当然異なってくると思っただけであつたので、時代も研究対象も異なる李青氏の発表ではあつたが、自分の研究とも結びつけて考えることができた。

二日目は「大衆社会と日本語文学」というテーマのもとに

第一部から第三部において先生方による発表が行われた。三〇分という時間制限を設けずに講義としてずっと聞いていた内容ばかりであったが、ここでは特に印象に残った発表の内容をいくつか簡単に紹介したい。

第一部では日比嘉高氏（名古屋大学）の「詩、スポーツ、メディア、イベントー1932年のロサンゼルス・オリンピックの場合」という発表が大変興味深かった。本発表で日比氏はスポーツイベントが大衆化するに連れ、スポーツが「国民思想の善導」の道具として作用するようになっていくところに文学も巻き込まれていったことを指摘した。そして『朝日新聞』のオリンピック選手応援歌や『羅府新報』（ロサンゼルスを発行地とする邦字新聞）におけるオリンピック詩歌、自由律俳句の結社が編んだ句集を例として用いながら、そこにアマチュアリズムとプロフェッショナルリズム、国際主義とナショナルリズム、個人主義と国家主義といった矛盾点が見られるとし、そのような文学作品がオリンピック競技の性質と相まって種々のナショナルリズムを展開していったのだと論じた。

また第二部では金孝順氏（高麗大学）が「植民地時期野談の変貌と日本語翻訳の政治性」という発表において、朝鮮固有の文学ジャンルである野談の概念を整理し直すとともに、その野談が朝鮮で流行った時期が一九二〇年代末から一九三〇年代初めにかけてだったのに対し、日本で翻訳されたのはその前後であることの不自然さを指摘し、その原因について言及していたのが印象深かった。金氏は韓国での野談の流行と日本の紹介

の時期がずれた理由について、日本の翻訳者たちが植民地統治のための同化政策、内鮮一体の根拠提示、植民統治の必然性、戦意鼓吹のための材料の一つとして野談を眺め、自らの目的に沿う形で作品を選び、また時には改変を施したためであると論じていた。金氏の発表をお聞きして、野談という文学ジャンルが日本の植民地統治の正当性を説明する道具の一つとして用いられたことは大変興味深かった。一方、日本で翻訳されたり紹介されたりした野談の共通点は何であったのかという点や、これらの野談が内包するどのような要素が日本の対外戦略と合致し、利用されるに至ったのかということが筆者が個人的にもう少し知りたいと思うところであった。

二日目の発表も初日同様、各発表者の後にはそれぞれ質問や活発な議論がなされたため、発表は予定時間を少し超過して終わることになった。そして天気も気持ちよく晴れた三日目の朝に「大衆化・階層化とジャンル」というテーマで第四部の発表が始まった。三日目の発表では、嚴仁卿氏（高麗大学）が「七・七・五」の四句二六文字を基本とする日本の伝統詩歌である「どどいつ」が朝鮮へ渡りどのように展開されたのかについて論じた発表がその題材と引用資料ともに大変目新しく、興味深い内容であった。そして三日目最後の発表は中根隆行氏（愛媛大学）の「原口統三『二十歳のエチュード』をめぐる座標系―夭折詩人と大衆化」であった。中根氏は、京城生まれで大連育ちの植民者二世で第一高等学校の学生であった原口統三の自殺とその遺稿である『二十歳のエチュード』が、同時代のメデイ

アや読者によつて藤村操の投身自殺と「巖頭之言」の反復であるかのようにとらえられ、偶像化されるに至つた経緯を子細に追うとともに、原口統三の死がそこまでセンセーショナルに報道され、「一つの哲学的な“青春の死”」として人々に崇められた原因を「純潔」、「無垢」、「自意識」といったキーワードを用いて分析した。一見似たような過去の二つの事件から作り出された同時代言説を現在において再構築し、そのずれを指摘した大変刺激的で興味深い発表であつた。

今回のフォーラムに参加して、様々な国から参加した先生方や大学院生の発表を近い距離で存分に聞けたことは、筆者にとつて何よりの収穫であつたように思う。そしてタイトルの設定から論の進め方、発表スライドの作り方まで他の方の発表から刺激を受け、学んだ点も非常に多かつた。また、文学研究は求められるべき答えや方向性が一つに定まっていけないからこそ、国や言語の枠組みを越えて研究をするところに可能性の広がりとおもしろみがあると感じた。

最後に、ここでは言及できなかった研究発表を含め、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」における発表者と題目を以下に全て記しておく。

【一日目】

セクシオン1 「東アジアにおける近代の時空間」

●李嘉慧（高麗大学）「初期在朝日本人社会における日本人遊女の表象―『韓半島』『朝鮮之實業』『朝鮮（及満州）』の記事及

び遊郭物を中心に」

●李青（北京師範大学）「教育小説『埋石捨石記』における教師像―訳者包天笑の改作を中心に」

●金旭（高麗大学）「植民地帝国大学の文芸雑誌研究―京城帝国大学と内鮮学友会雑誌『清涼』の背景を中心に」

●郭同豊（東興大学）「植民地時期に台湾におけるプロレタリア文学の「時間性」および「空間性」―頼和から楊逢まで」

●金晶晶（九州大学）『『満鮮日報』における朝鮮人のモダニズム詩―その読みの可能性をめぐって』

セクシオン2 「探偵と幻想の世界」

●趙藝羅（九州大学）「一九三〇年代の日本における変格探偵小説と科学小説―蘭郁二郎の作風変化を手がかりとして」

●黄研慈（輔仁大学）「東野圭吾『白夜行』論」

●尹芷汐（名古屋大学）「日本の社会派推理小説と1980年代中国の市民社会」

●南有玫（高麗大学）「ライトノベルから見た現代日本における若者の研究―〈ブギーポップシリーズ〉を中心に」

●葉彦均（輔仁大学）「乙一「夏と花火と私の死体」論―感覚の特徴と多層世界について」

セクシオン3 「性・愛と他者」

●趙海濤（北京師範大学）「尾崎紅葉の翻案方法―「夫と鸚鵡」から「やまと昭君」への主題変容」

●朴昭恰（高麗大学）「村岡花子の1940年代の少女表象研究―創作物、雑誌『少女の友』を中心に」

●陳文（北京師範大学）「武田泰淳『富士』論―「狂気」へのアプローチとしての女性性」

●曹榮峻（輔仁大学）「津島祐子『黙市』論―津島佑子が描くシングルマザーの表象」

●陳晨（名古屋大学）「主体の喪失／言葉の（再）起動―2000年代における〈フェミニズム・文学・批評〉を再考する」

【二日目】

第1部 ジャーナリズムと文学

●鄭炳浩（高麗大学）「1920年代朝鮮半島における在朝日本人の階級言説の形成と文芸欄の中の階級闘争」

●日比嘉高（名古屋大学）「詩、スポーツ、メディア、イベント―1952年のロサンゼルス・オリンピックの場合」

●呉佩珍（政治大学）「日本植民地期のマスメディアにみる北白川宮像」

●王志松（北京師範大学）「日本戦後の「文壇」諸相とジャーナリズム―批評言説を中心として」

第2部 政治・制度と言語表現

●単援朝（崇城大学）「戦時下の歴史小説―二つの『阿片戦争』から」

●和泉司（豊橋技術科学大学）「邱永漢にとつての「大衆文学」―直木賞の意義と制約」

●金孝順（高麗大学）「植民地時期野談の変貌と日本語翻訳の政治性」

●林涛（北京師範大学）「中国における新美南吉童話文学の翻訳と受容―小学校語文教科書に関する考察を中心として」

第3部 東アジアで活躍する探偵達

●石川巧（立教大学）「雑誌「黒猫」と戦後探偵小説の胎動」

●愈在真（高麗大学）「植民地朝鮮における娯楽としての犯罪―探偵小説的妄想の消費」

●柴紅梅（大連外国語大学）「日本探偵小説と中国の都市大連の関連」

●横路啓子（輔仁大学）「植民地台湾の探偵小説―金閔文男「龍山寺の曹老人」を中心に」

【三日目】

第4部 大衆化・階層化とジャンル

●王成（清華大学）「近代日本における修養論と大衆啓蒙―加藤咄堂の修養論と民衆教化を中心に」

●嚴仁卿（高麗大学）「日本伝統文芸とモダン京城の出会い―朝鮮半島における「俚謡」ジャンルの展開を中心として」

●呉亦昕（中正大学）「植民地台湾における童謡運動」

●林雪星（東呉大学）「牛島春子と「満州文学」―プロレタリア文学とのかかわり」

●中根隆行（愛媛大学）「原口統三『二十歳のエチユード』をめぐる座標系―夭折詩人と大衆化」

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年）